

# 学生取材レポート

第18回京都教育懇話会

日本の英語教育「今、未来」

12月20日(火)、立命館大学朱雀キャンパスにて、第18回京都教育懇話会を開催した。「日本の英語教育「今、未来」」とテーマを銘打った今回は、様々な分野で国際化が進む日本で、グローバル人材育成が急務となっている今、「日本の英語教育の現状、またこれからの日本に求められる英語教育とはなにか」を議論する場となった。

第一部では、有限会社ブルース・インターフェイス 代表取締役のブルース ウィットレッド氏が基調講演を行った。「適切な環境と毎日の繰り返し」の重要性を訴えたブルース氏。英語教育の参考例として日本の音楽教育を挙げた。音楽のレッスンでは生徒が主体であり、レッスンとレッスンの間にも毎日練習をしており、どんどん上達する。英語も同じく「毎日続けること」が適切であるが、現在の教育では先生が授業の主体であるため、授業が終わるとそれきりで家庭学習をしない傾向にある。そのため、レッスンでは先生に実生活を想定した「手本」をしてもらい、生徒が考え、発声する機会を設けることが望ましいとの改善方法を示した。また講演の中では、ブルース氏が自ら開発したサイバードリームで模擬授業を行った。双方向での理想的な実践教育を実現した機械で、会場全体から参加を頂き、幼児期から聴覚を鍛えることの重要性を提言した。

第二部では、有限会社ブルース・インターフェイス 代表取締役のブルース ウィットレッド氏、京都市立日吉ヶ丘高等学校 校長の村上英明氏、立命館宇治高等学校 国際教育担当教頭の東谷保裕氏の三名でパネルディスカッションを行った。「英語教育には何が求められているのか」を柱に議論を展開。コーディネーターを務めた東谷氏は「どうすれば教育の質を高められるのか」を考えていけないといけない。英語教育に重要なポイントとして「発音」「中身」「討論」を挙げた。社会に求められるのは伝える中身、内容。また、自らの意見を発話する力。「あくまで英語はツールであり、目的化してはいけない。英語はコミュニケーションをとるためのソリューションである」と訴え、英語と日本語では情報量が全く違い、広い視野を身につけるためにも英語は重要とした。

続いて、ブルース氏は「グローバルな社会に出るためには、必ず英語が必要。子供たちに財産として身につけるべきものだということを認識させなければならない。外国の教育スタイルも参考にして改善を図るべき」。社会の変化に対応させるためにも「スピード感を持った教育が求められる」と国際的な視点を持たせる環境づくりの必要性について発言。

この発言から村上氏は「内なる国際化がかなり進んでいるように感じる」と言及。数十年前とここ数年を比較すると英語としての見方が様変わりしている。数十年前は、英語を専門にして先端としての英語であって通訳等の職業に就くためだったが、ここ数年はセカンドラングエッジとしての英語が東南アジアを中心に急速に広まっている。それは、一般的な人が商売でも英語を使う状況。そういった人たちが、日本で働くことになる職場まで危ぶまれるのではないかと話し、危機感を訴えると伴に「先端部分をどう引っ張るのか」と「ボトムをどう引き上げるのか」の二面で考える必要があると説いた。

また、会場内では、グループ討議を行い、高校生、大学生、業種を越えた社会人の方々との意見交換が行われ、参加者の意識がより一層高まった。

【取材：追手門学院大学一回生 難波亮祐】